

シオンよ、恐れるな、
力なく手を垂れるな

ゼファニヤ書 3 : 14 - 20



司祭 ヨハネ 井田 泉

2015 年 12 月 13 日

降臨節第 3 主日

奈良基督教会にて

今日は先ほど朗読された旧約聖書・ゼファニヤ書の世界に入
ってみたいと思います。

「世界に入りたい」と言ったのですが、聖書を読むとい
うのはそういうことだという気がします。聖書の言葉が、今の
このわたしに、あるいはわたしたちに何か役に立つか、助けに
なるか、という思いで読むこともあります。危機を抱えている
ときは特にそうです。わたし自身も救いとなる言葉を求めてど
れほど聖書をめくったかしれません。

けれども聖書はわたしたちが一生をかけて付き合っていく命
の源です。自分に直接どう関係するか、という読み方だけでは
なく、すぐに解決や回答を求めず、聖書のその世界に入ってみ
るという読み方も大切にしたいのです。そこからかえって、助
けや導きが与えられることがあります。

預言者ゼファニヤ。旧約聖書の終わり近くに収められたおよ
そ6頁の書物です。紀元前7世紀、ユダ王国のヨシヤ王の時代の
人です。同じ時代に預言者エレミヤがいました。

預言者ゼファニヤが見たのは、神に背いた墮落したエルサレ
ムの現実です。

今日朗読されたのはゼファニヤ書の最後の箇所、3章の後半
でしたが、その3章の冒頭ではこう言われています。

「災いだ、反逆と汚れに満ちた暴虐の都は。この都は神の声を
聞かず、戒めを受け入れなかった。主に信頼せず、神に近づこ
うとしなかった。

この都の中で、役人たちはほえたける獅子、裁判官たちは夕暮れの狼である。朝になる前に、食らい尽くして何も残さない。」
ゼファニヤ 3:1-3

国の役人と裁判官は本来、神と民に奉仕すべき存在であるのに、自分の立場と力を用いて人を襲い利益をむさぼって、貧しい人々の生存を脅かしている。それでは直接神に仕える人たちはどうなのでしょう。

「預言者たちは、気まぐれで欺く者。祭司たちは、聖なるものを汚し、律法を破る。」 3:4

預言者、祭司という信仰の指導者たちが不正を行い、神の掟を破り、神の名を汚している、ということです。こうなったらどこに希望があるのでしょうか。

しかしゼファニヤは、この社会の現実の中に、神がおられるのを感じました。

「主は、都の中にいまして正しく、決して不正を行われぬ。朝ごとに裁きを与え、それを光とし、誤りをなさることはない。不正を行う者は恥を知らない。」 3:5

神が怒りを発せられるのを、ゼファニヤは見ました。

この続きはもう現実というよりは、ゼファニヤが神から示されたビジョンです。

神は、悔い改めようとしないこの地に怒りと熱情の火を注いで焼き尽くされる。人々は遠い国々に散らされてしまう。

けれども神が待っておられた人々が、やがて帰って来ます。

「クシュの川の向こうから、わたしを礼拝する者、かつてわたしが散らした民が、わたしのもとに献げ物を携えて来る。」 3:10

クシュとはエチオピア、川とはナイル川でしょう。擄取と虐げと破滅を経験して散らされた人々の中に、神を礼拝したいと願いが起こりました。その人たちが戻ってくるのです。

かつては苦しみと迷いと自暴自棄に陥っていた人々が、神を礼拝することしか救いはない、そこにしか回復はないと思って帰って来ます。これを見られた神のうちに、愛が湧き起こります。ゼファニヤは神の声を聞きます。

「わたしはお前の中に、苦しめられ、卑しめられた民を残す。彼らは主の名を避け所とする。イスラエルの残りの者は、不正を行わず、偽りを語らない。その口に、欺く舌は見いだされない。彼らは養われて憩い、彼らを脅かす者はない。」 3:12-13

ここで、強く大きな呼びかける声が響き渡ります。それが今日読まれたゼファニヤ書の初めの箇所です。

「娘シオンよ、喜び叫べ。イスラエルよ、歓呼の声をあげよ。娘エルサレムよ、心の底から喜び躍れ。」 3:14

シオンとはエルサレムの東南の丘の名前で、ここに神を礼拝する神殿が建てられていました。シオンは同時にエルサレムの民衆を指して使われます。

(わたしたちの教会も奈良の東の丘の上にあります。)

苦しみと裁きと滅びを経験してきた人たちに対して、だれが「喜べ」と呼びかけるのでしょうか。

「主はお前に対する裁きを退け、お前の敵を追い払われた。イスラエルの王なる主はお前の中におられる。お前はもはや、災いを恐れることはない。」 3:15

なぜ喜べと言うのか、どうして喜べるのでしょうか。その理由はひとつだけです。

「イスラエルの王なる主はお前の中におられる。」

主がお前の中におられる。天のかなたにではなく、お前の中に主がおられる。多くを失ったとしても、深く傷つけられたとしても、過ちを重ねたとしても、神がおられるなら、神がこの中に、わたしたちの中におられるなら、希望があります。命があります。回復があります。神が見捨てておられないなら、望みがあります。

これがインマヌエルです。神はわれらとともにおられる。これがクリスマスの意味です。

悲しみと痛みを果てしなく経験して、神に見捨てられたように思ってきた人々は、力なく手を垂れて目を伏せています。しかし呼びかける声は言います。

「その日、人々はエルサレムに向かって言う。『シオンよ、恐れ

るな、力なく手を垂れるな。』 3:16

ゼファニヤをとおして聞こえてくる声は、人々を失望から引き上げます。力なく垂れていた手は引き上げられ、合わせられて祈りの手となります。神がわたしたちを喜びとしていてくださるなら、勇気をもって新しく生きることができます。力なく垂れていた手は、祈る手となり、働く手となります。

2600 年も昔のゼファニヤの言葉は、わたしたちに何を促すでしょうか。

第1に、わたしたちをまっすぐ生きるように促します。神は不正と偽りを喜ばれない。強い者の食欲を喜ばれない。神は社会の中に正しいことを求められる。人と人の間に、人の心に真実を求められます。

第2に、神を礼拝することを促します。

神のもとに帰るしか希望はない。しかし神に帰り、真心をもって神を礼拝することに希望があります。そのことを神は喜んでくださいます。

第3に、力なく手を垂れることをやめて、手を合わせ、手を上げて祈り、手を用いて神と隣人のために働くことを促します。

そのとき、思いもかけないことをわたしたちは知らされます。それは、神がわたしたちを喜びとしておられる、ということだ

す。

「お前の主なる神はお前のただ中におられ、勇士であって勝利を与えられる。主はお前のゆえに喜び楽しみ、愛によってお前を新たにし、お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる。』

3:17

神がわたしたちのただ中におられ、わたしたちを喜びとし、わたしたちのゆえに喜びの歌を歌われる、ということです。

神は、ご自分の子どもたち（つまりわたしたちのことです）が帰ってくるのがうれしい。真実を求め、礼拝することを願い、手を上げて祈りはじめるわたしたちのことがいとおしいのです。

わたしたちを喜びとされる神が、わたしたちの中に肉体をもってきてくださる。これがクリスマスです。新しい思いをもってクリスマスを迎えましょう。

祈ります。

神さま、あなたのうちにこそわたしたちの希望があることを教えてください。力なく手を垂れているわたしたちを力づけ、手を合わせて祈り、手を用いてあなたのために働くわたしたちにしてください。主よ、おいでください。アーメン